体 育 学 研 究

第 8 卷 第 2 号

昭 和 39 年 6 月

A. ASAI: Einleitung in die Leibeserziehungskunde

体 育 学 の 序 説 的 考 察

奈良女子大学 浅 井 浅 一

課 題

体育学が体育を科学的方法で明らかにしていく任務をもっていることはいくまでもない。けれども体育学を科学として研究していく過程には数多くの問題に直面する。そしてこれらの問題を検討しないかぎり前進しない。

これらの問題は、あるときは事実 Tatsache と現実 Wirklich との関係を明らかにしなければならない問題であつたり、他の場合は、現象と必然性との関係する問題であつたりする。しかもこれらの個々の問題は、けつきよく、体育学をどのように独立科学として認めていくことができるかという課題に密接に関連している。そして体育学を独立科学として認めるためには、研究態度もさることながら、体育学の構造そのものにより多くの問題をもっている。

第一に問題になるのは、体育理論 Leibeserziehungskunde と体育学 Leibeserziehungswissenschaft との関係である。一般に体育理論論といわれているものは、体育に関する知識の集積によつて組立てられているが、この知識は、身体運動に關係する経験から生産され

たものである。したがつて、体育理論の知識は、身体運動による実践を経験し、意識化するところから生れている。実践の経験とその意識化が知識を生産するとなると、体育理論の成立過程を知るためには、実践と経験との関係について考えてみなければならない。

実践はそのままでは知識にはならない。実践は経験することによつてはじめて知識となる。スポーツ、体操、ダンスも身体運動にとどまるかぎり実践と呼ばれるべきものであつて、それが意識をともなつてはじめて経験となる。この経験を最も広く解するならば、身体運動を実践するにあつて直接知覚する程度のものから、さらに、それをきつかけにして、時間的に変化する意識の状態にいたるまでの全部を含めて経験といふことができる。

この経験は個人によつてみな同じではないし、種類も多いが、それを形式の上から分けて考察すると、内的経験と外的経験となる。身体運動を、スポーツ、体操、ダンス、武道といったように、それぞれをちがつたものとして経験するときは外的経験であり、心構えや態度、いわば、自己の心的状態において意

識してゆくときは内的経験である。この区別は、しかし絶対的なものでなく、実際の経験は実践が意識された後にはじめて経験されるものであるから、この点からすれば、外的経験といつてもそれは経験されたものであるから、やはり内的経験であつて、両者は厳密には区別できるものではない。

この経験は、また、直接経験と間接経験にもわけられる。たとえば、知覚によつて獲得した外的経験は直接経験であり、それを意識し、反省し、考察した結果獲得した経験は間接経験である。さらに特殊なものに純粹経験があり、これは、体験の真只中にあつて、意識も思考作用もいまだ加わらない。いわば概念以前の経験である。

経験の内容をこのように区別してくると、体育理論の知識は、身体運動の実践にあたつて、この純粹経験を基盤に、直接経験が間接経験となる過程において生産される知識である。

次に知識の生産過程においてもいくつかの問題がある。体育理論の知識は、このように経験の認知であるから、認知の形式が知識の形式を決定してくる。経験の認知についても、直接的認知とそれに関連した認知とに区別してみると、経験の認知は、自分だけがわかる主観的認知と、自分と他とを比較して得られる関連的認知とに区別できる。

直接的認知は、知識の根拠を他に依存しないで、自分だけの認知で満足しているものであり間、接的認知は、知識の根拠を自分以外のところにおいて推理していつたものである。したがつて、実際の知識は直接的認知によつて生れた知識であり、間接的認知は、推理、思考によつて生れてきた知識である。とくに主観的知識に対して、一定の客観的根拠をもつた知識を科学的知識という。この科学的知識は、知識作用 Kennen よりは、認識の結果である知識 Wissen の方により重きをおいている。体育学が体育理論とちがつてくる点はこの科

学的知識によつているところにある。

また知識が生産される過程には模倣と創造の問題がある。

現在の経験を知識に表現するときには、過去から用いられてきた概念や思考の形式を借りなければ一般に理解してもらいような説明ができない。知識の社会的形式にしたがわないと個人の知識は他人に理解してもらうことができない。ところが、自分の現在の経験は、過去の形式を模倣するだけでは十分に現わしてゆくことができない。この矛盾を解決していくためには、自分の経験を最も近く表現していくことができる言葉や文字、概念や思考形式を選択し、それを用いていかなければならない必要がおこってくる。この段階になると、模倣といつても、ただ過去の形式にしたがうだけでなく、自主的にそれに一致することがこころみられている。選んだ過去の形式には、すぐれた人の思想や経験の処理がすでにその形式の中に含まれているものであるから、模倣するときには、このすぐれた人の思考形式をえらんでそれに一致しようというこころみがなされている。

それにしても、模倣はやはり模倣であつて創造ではない。模倣であるかぎり、習熟するまでは興味をもつが、満足してしまえば興味を消失する。ところが、創造は、模倣し習熟したものを道具とし、自分の目的にしたがつてそれを駆使する。本当の体育理論は、たとえば、言葉や思考形式が過去のものであつても、生産された知識は新しい体育の目的から創造された知識によつて成立する。

体育の知識の生産過程におこる次の問題は、説明の論理性と概念を構成する場合の言葉や文字の問題である。

身体運動の一切の経験は直観できる。しかし直観にとどまるかぎり知識の生産はできない。直観は写真のように全ての経験を一挙に把握しているが、その知識はいまだ一つの空間に並存状態におかれておつて、このような

直接的知識はいまだ言葉や論理をあまり必要とはしていない。

しかし体育理論が必要とするのは、直観された直接的知識よりは、間接的知識である。この間接的知識は、経験し意識しているものを言葉や文字で筋道を立てて説明し、あるいは記述しなければ獲得していくことができない。空間的並存状態において把握しているものを時間的順序にうつし、一瞬のできごとでも時間的順序にしたがって抽象化していくことによつてはじめて知識として生産していくことができる。

ところが、言葉や文字でそれを表現していくときに一つの問題が生じてくる。写真の場合は実物に近いものを表現していくことができるが、それを文字で表現するとなると全く形の似ないものになってしまう。このように言葉はものを抽象するが、その場合でも、日本と西洋では条件がちがってくる。西洋の学術用語は日常の経験に結びついているが、わが国の学術用語は日常用語と結びついていない場合が多い。たとえば体育の「現実」wirk-という言葉は、ドイツではすでに日常生活において、「本当」という意味で使用されているのに反して、わが国で「現実」という言葉を用いるときは、もはや日常生活での言葉ではなくて、一つの学術用語となつている。西洋では抽象的観念をつくるときには日常用語に定義を与えていきさえすればよい場合でもわが国では新しい経験には新しい学術用語をつくつていかなければならない。このことが経験の世界と知識の世界との間に溝をつくっている。次に西洋の文献から学んだ抽象的観念を表現するときには、この新しい観念を漢字で表現していかなければならない。この場合にも、適切な用語や言葉がないときは、漢字を用いてそれに最も近い意味の言葉をつくつて使用する。たとえば、ドイツ語の Leibesübungen, Bewegungsbildung, Leibeserziehung, Körperpflege, Körperkultur など少しづ

つ異つた意味をもつた言葉でも、みな同じ体育という語で表現する。それでいて、さほど問題にされないあいまいさがあるのは上述のような理由が存するためである。

体育に関する知識や学問の世界でも、西洋のように日常生活の世界と連続していないことが研究を親しみにくいものにしたり、体育の実践が体育理論を感情的に拒否したりする原因にもなつてくる。しかし、知識はもともと具体的経験意識の結晶であり、経験世界の問題を解決する任務をもつものである。それにもかかわらず、体育が、直接経験の世界にとどまつて、間接的知識の世界に入りこめないでいたり、知識が抽象的世界だけに動きまわつておつて経験の世界を軽視している間は、本当の体育理論は成長してこない。

体育理論は身体運動に関係した経験の認知によつて生産されるが、同時に、体育の科学的研究が発達してくることによつて、いつそう内容を豊にし正確にしてくる。

けれども、体育理論はそのままでは科学としての体育学にはならない。科学としての体育学が成立するには、科学一般からの批判がなされて来なければならない。

体育の直接の経験は身体運動に関係した経験であるが、それに関連する経験はさらに経験領域を拡大するし、それを基盤にして知識も生産されてくる。そして体育理論もまた科学的な事実の上に立つて、これまでの知識に吟味を加えながら、偏見を除去し、科学的資料を基礎にしてその拡大発展をはかっている。そのために体育理論は、つねに体育学の発達を要求している。

体育理論は、体育実践の経験に対する認識によつて成立しているが、そこには、いまだ、感情的、主観的認知が含まれている。それに反して、体育学は、経験を一定の客観的根拠から認識しようとする。この体育学は一つの独立科学として成立することを望む。そのために体育学は独自の原理にしたがつて研

究をすすめていく必要がある。体育学が独自の原理をもつて研究することによつて、これまで他の諸科学が見落してきた事実を新しい要因にしたがつて改めてとりあげ、他の諸科学が周辺においていた事実について新しい意義を認め、この諸事実に対して将来の発展を予想していくことができる。

体育学が独立科学となり、独自の原理にしたがつて研究するといつても、その傘下におさめる研究の方向まで全てを一樣にすることを意味するものではない。むしろ、科学一般と同じように、実証することに関心をもつ研究もあれば、価値を認識するための研究があつてもよいし、合理的認識に対して、非合理的認識を尊重する研究があつてもさしつかえない。むしろ、それぞれの方向に、体育学として多くの個別学を成立させていくことが発展である。これらの個別学が、各部門において体育に関係して新しい知識を生産し、価値を発見し、これまでに足りなかつた面を充足し、知識に再吟味を加えていくことについては他の諸科学とちがっているものではない。

しかし、体育学が独自の原理にしたがつるとなると、応用の学として存在することを否定してくる。ここにスポーツの科学と体育の科学との関係が一つの問題になる。

いうまでもなく、体育学は身体運動の科学 Die Wissenschaft der Leibesübungen ではなくて、体育の科学 Die Wissenschaft der Leibeserziehung である。したがつて、スポーツ学 Die Sportwissenschaft と体育学は同じではない。それがスポーツ学と体育学が同義語に使用されるところに問題がある。スポーツそれ自身も、今日、スポーツが著しく普及発達してきたために、スポーツの概念がいまいになり、研究の原理も統一を欠くようになった。その原因は、スポーツという言葉が流行語となり、スポーツ本来の意味にさらにスポーツに関係する隣接的意味 Nebenbedeutung までがそれに加わつてきたところにあ

る。したがつて、今日のスポーツの内容はこれまでとはちがつてはるかに複雑なものになつている。そのために、スポーツ学それ自身も、現代の意味するスポーツの概念を新しく規定する必要に迫られているが、この問題は、直接、ここでは関係がないから省略するとして、なお、体育学とスポーツ学が同義語に用いられていることについて考えてみたい。

この問題を検討するために、ここでは、スポーツと人間の二つの概念を設定し、両者の関係から考えてみたい。スポーツと人間との関係は同時関係である。スポーツが人間をつくるのに対して、人間もスポーツをつくる。前者は体育学の中心問題であり、後者はスポーツ学の主要問題である。しかし、スポーツ学でも人間に対する教育作用を扱わないわけではない。けれども、スポーツ学で扱うときは、教育の問題は、第二義的な問題となる。したがつて、スポーツ学を体育学と同義語に解しているときは、体育学は応用の学として考えられている。

それでは、体育学は応用の学であり、方法の学なのであろうか。これには、体育学に対する方法学的批判が必要であらう。

体育学も科学であるかぎり科学一般と同じように客観的根拠にもとづいた認識によつて知識が生産されなければならないであろうがこの生産過程の方法学的批判は、自然科学的方法と精神科学的方法によつて行われているしかし、このかぎりにおいては、体育学は応用学であつて矛盾は感じない。しかしながら体育学が独立科学をのぞむ場合は、それ以外に、体育学独自の方法からも批判されてこなければならない。

体育学が独自の方法を発見するといつても、体育学が他の諸科学と全くちがつた研究対象をもたなければならないということではない。これは他の科学に例をとつても同様である。たとえば、生物学、解剖学、心理学、社会学などはそれぞれみな同じ人間を対象に

している科学である。同じように体育学もまた人間を対象に研究する学問である。この点に関するかぎり、体育学もまた他の諸科学と同じように人間科学の個別科学となりうる。これら個別科学は人間科学全体の認識の中で分節部門として位置を占め、人間を分析し、各部門の研究結果を最後に総合して人間把握に対して完全な認識を果していく。

方法学的批判から、体育学は、人間科学の分節部門として独立した個別科学となることができる。そのために、独自の研究目的をもつことができるようになり、独自の問題設定も可能になり、自己の研究領域も限定されてくるから、研究の混乱や重複をさけることもできるし、自らの研究方法を発見していくことも可能になる。体育学が、自己の研究領域と他との境界が明らかになれば、諸科学との横のつながりも緊密になるし、隣接科学の方法や結果についても信頼ができるようになる。そして、解すべき問題の出発が同じであつても、考察の結果、隣接科学のそれとちがったものを発見していくことができる。

体育学は方法学的批判によつて、人間科学の分節部門として独自の領域をもちうることを知るけれども、それだからといつて、体育学は独立科学となり得たであろうか。

体育学が人間科学の個別科学としてその位置を占めてくると、体育学の問題は自然科学と精神科学の二つの側面からとりあつかわれてくる。しかし、体育学の問題は、人間を解明するための自然科学的側面と精神科学的側面とからだけで成立しているものではない。この段階にとどまるかぎり、体育学は人間科学の応用の学であるとみななければならない。

体育学が独立科学を希望するならば、問題の解明にあたつて、自然科学的側面と精神科学的側面との間に存在する深い溝に一つの橋をかけ、関係しない二つの領域に結合帯を与えていかなければならない。それでは、この橋の結合帯となるものは何んであろうか。そ

れは「人間」そのものではなく、人間の「教育」のそれである。人間でなくて人間の教育として身体や精神の問題をとらえてくることによつて、スポーツ学が第二義的に考えていた問題は第一義的問題となり、これまでの個別科学では意識外とされていた教育的態度が表面に現われてくる。その結果、身体運動に関係する経験も、人間形成についても、欠陥や可能性が明らかにされなければならなくなり、教育の可能や限界がたしかめられなければならない。この段階になれば、体育学は教育学 *Die Erziehungswissenschaft* の領域に位置を求めるようになる。そして、体育学は方法学的にのみ批判されることからはなれて、むしろ世界観によつてながめられ、その上に立つて、体育学は、人間の自然の状態についての啓発および社会の発展、文化の拡大や維持に関連した研究が行われるようになる。これに対して新しく社会科学の方法も関係してくる。このようにして、体育学は設定する問題の基盤や背景に変化をもたらし、生産する知識の質と量にもちがいが生じてくることになる。

それでは、教育科学の領域で体育学が位置を求めるといつて、どこに自己の独自の位置を占めることができるであろうか。教育 *Die Pädagogik* は目標を「精神的なもの」に求めるが、体育はこれを「身体的なもの」の教育から到達しようとする。ここに体育独自の教育の場面がある。この独自の場面において問題をとらえ、それを研究していくことによつて、独自の体育学の分野がわくづけられ、他の分野からの区別が生じ、体育学は自ら一つの独立した科学として成立する。

要 約

体育学は独自の原理にしたがつて研究をすすめてこうとするといくつかの問題につきあたる。その何れも、けつきよくは、独立科学として体育学を認めるかどうかの問題に関

係する。上述した考察のかぎりでは、次のように要約することができる。

(1) 体育理論と体育学は、何れも身体運動に関係した経験から生産された知識ではあるが、体育理論の知識には感情的、主観的知識が含まれているのに対して、体育学の知識はそれを排除し、客観的根拠による認識から生産されている。

(2) スポーツの科学と体育の科学と同義語に解するとき、体育学は応用の学として認められる。

(3) 体育学は独立の学か応用の学については方法的批判を必要とするが、体育学も人間を対象に研究する学問であるとする、体育学は人間科学の個別科学となる。

(4) 独立科学を望むならば、独自の原理にしたがつて研究されなければならないが、人間を対象に自然科学的側面と精神科学的側面から追求されるかぎり人間科学の原理にしたがつている方法の学ということになる。

(5) 体育学が独立科学となるためには、自然科学的側面と精神科学的側面との間に存深い溝を結びつける必要がある。その結合帯するの役を果すのは人間でなく人間の教育である。

(6) 教育は精神的なものを目標にするが、

体育は身体的なものから、この目標に到達するところに特性をもつ。

(7) ここにおいて、体育学は、人間を対象にし、教育の領域に位置を占め、身体的なものから問題を把握し研究することによつて独立科学となる。すなわち、体育学は、対象を人間科学と同じくし、教育科学と共通の領域をもち、体育の場において自己の問題をとらえて独自の研究をすすめていくことができる。この独立した体育学は自己の知識体系を確立することによつて、その後の体育学に対して、知識の吟味と問題の解決の二つの方向に貢献する。

参 考 文 献

- 1) G. Vaupel: Die Wissenschaft von der Leibeserziehung, Monatsschrift, Die Leibesübungen, 1953, 8.
- 2) P.W. Kaesen: Körperpflege und Charakterbildung, 1930.
- 3) P. Häberlin: Möglichkeit und Grenzen der Erziehung, 1936.
- 4) O. Hammelsbeck: Leibeserziehung in der Gesamterziehung, Monatsschrift, Die Leibesübungen, 1954, 3.
- 5) L. Mester: Sozialpädagogische Fragen in der heutigen Leibeserziehung, Monatsschrift, Die Leibesübungen, 1954, 3.

Einleitung in die Leibeserziehungskunde

By

A. Asai; Nara Mädchenhochschüle

Im dem Forschungsprozess der Leibeserziehungskunde begegnen uns noch so viele schwankende Fragen. Aber schliesslich handelt es sich darum, ob sie eine Einzelwissenschaft sein kann.

Und die Leibeserziehungskunde kann eine Einzelwissenschaft sein, erst wenn sie das menschliche Sein behandelt, es auf dem Gebiet der Erziehung überhaupt begreift, und alle Fragen, die da geschehen, in der wirklichen Situation der Leibesübungen lösen will.

Studies on Psychogalvanic Phenomenon in Physical Movements No.5 On Psychogalvanic Phenomenon in response to Kendo play and Kyudo play imagined and viewed in motion picture

By

A. Katsube, Nagoya University

E. Tadaki, Kinjogakuin College

Difference of response in Psychogalvanic Phenomenon in response to Kendo play and to Kyudo play (Archery) imagined among skilled players, beginners and unexperienced subjects in Kendo and Kyudo were studied. And the same studies were made when these subjects were watching the motion picture of a match of Kendo and several shooting of Kyudo by skilled players, beginners and unexperienced subjects in Kendo and Kyudo.

The results of these experiments were summarized as followed.

A. In Kendo

The skilled players responded with characteristic wave of Psychogalvanic Phenomenon when they imagined their own performance of Kendo, and also they watched the motion picture of a match of Kendo. However the beginners show frequent wave to blow, and the unexperienced subjects did not show any remarkable wave in Psychogalvanic Phenomenon in response to Kendo play imagined and watched in motion picture.

B. In Kyudo

The skilled players did not show any remarkable wave, but the beginners show frequent wave in Psychogalvanic Phenomenon in response to Kyudo play imagined and viewed in motion picture.